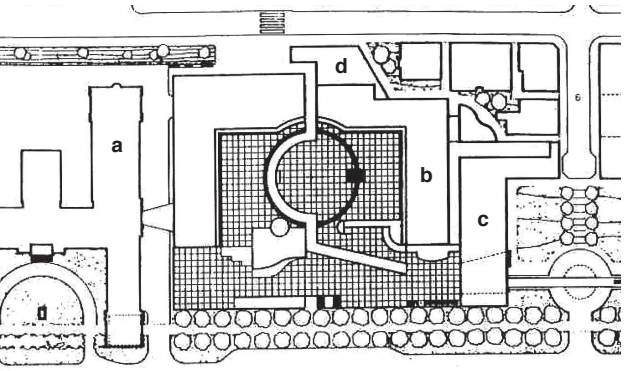
20世紀の建築空間遺産 18

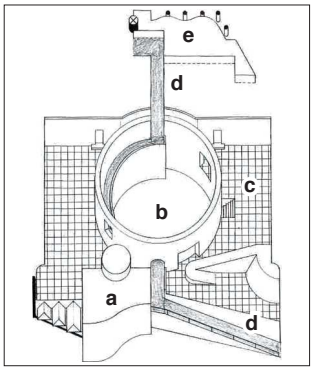
地域建築空間研究所 小林 良雄
写真：鎌田一夫

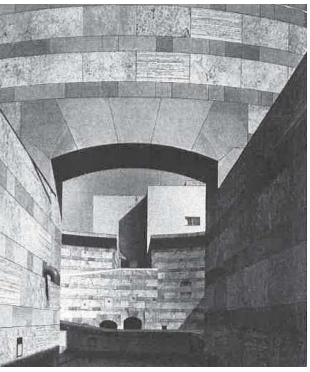
シュトゥットガルト州立美術館　1984年　ジェームス・スターリング／マイケル・ウィルフォード

エントランスホール前からの外観



配置図　a旧美術館　b新美術館　c劇場・音楽教室棟　d図書館棟





左上 展示室　右上 主要部図解図　aエントランスホール
b ロトンダ　c彫刻展示テラス　d歩行路　e図書館1階
左下　歩行路からロトンダを望む　右下　ロトンダ内部
2段以下は『JAMES STIRLING AND MICHAEL WILFORD" BUILDINGS AND PROJECTS 1975-1992』による

都市文脈への多様な応答

本連載12回目で採り上げたレスター大学工学部校舎の設計者スターリングは、その後、ケンブリッジ大学歴史学部図書館('66年)やオックスフォード大学の学生寮（'71）などを完成させ、モダニズム建築の批判的継承による現代建築化を牽引した。そこには、英国の産業革命以来の工業技術と煉瓦造の工場や倉庫など実用本位の建築からの学びがあり、それを「ファンクショナル・トラディション（機能主義の伝統）」と称した。ハイテク志向のフォスターやロジャースに影響を与えたが、スターリング自身は建築の建つ場所の文脈重視に転じ、'70年代半ばからのドイツでの複数の美術館指名コンペを経て、実施権を得た新シュトゥットガルト州立美術館においてその関心事を結実させた。

敷地は、市の中央駅に近く、西側の幅広い自動車道と、それに平行の約100m離れた東側斜面上部の街路との間、高低差、約12mの斜面地である。北側には棟がH字型の新古典主義様式の旧美術館が建ち、南側には道路が通る。

プログラムは、美術館を主としつつも中、小劇場や音楽教室、図書館を含む複合施設であり、それに斜面の上下道を結ぶ短絡歩道が求められた。

新美術館は3層で、自動車道レベルに駐車場を設け、その屋上を人工地盤に見立て、入口階とした。この階の基本平面は矩形だが、内部中央にロトンダと呼ぶ厚い壁の円筒形、屋根無しの彫刻展示とくつろぎの場を兼ねたコートを設けたのが特徴だ。前面はうねるガラス・スクリーンで押し出し、エントランスホールを拡げている。南側には道路対向面の将来計画を見越して逆L型の劇場と音楽教室棟を加えている。ピロティがある図書館は4階建てで斜面上の街路に面して建ち、街並みの一要素になっている。内部は、特別展示室、ロトンダ、講堂を併置し、エントランスホールには独立構造の受付や上階への斜路、昇降機の櫓を布置して動きを誘う。その上階は、H字型旧棟に呼応してロトンダを囲む凹字型の展示室棟とし、この階で旧棟と結び、ロトンダとの間の屋上は彫刻展示テラスとしている。

ロトンダは、シンケル設計のベルリンのアルテス・ムゼウム（1830年）を想起させる。その翻案だ。その内壁に沿って上部の図書館脇から短絡歩行路を導入貫入させ、内部に閉じず都市空間に繋げて開き、市民と来訪者の出会を仕掛けている。また、ワイセンホーフ住宅展示場（'27）がある都市であり、今もコルビュジェなどの建築が遺る。図書館棟はモダーンな設えでそのオマージュだろうが、遊びに堕せず全体を市民に意味ある空間にし得ている。

つまりこの美術館は、場所の時間的空間的、伝統文化や都市空間の文脈に応える有様を説得的に示しているのだ。